



元プロ野球選手が向かう新たな夢

いまや常勝を誇る東洋大硬式野球部。
卒業生にはプロ野球や社会人野球で活躍する選手も多いが、
彼らはみな、後輩たちが優勝に湧き立つ喜びを温かい
まなざしで見つめながら、かつて同じグラウンドで汗を流した、
原点の日々を想っているに違いない。
今回登場するのは11年前、
同じく神宮球場でリーグ優勝の胴上げに舞った人物。
そして、さまざまな経験を経て、いま再び、
新たな夢を抱き東洋大のキャンパスで学ぶ学生でもある。

三浦 貴さん

Taka Miura

新たな夢



ハードな仕事を終えてからの授業だが、いつも真剣
7限、手形小切手法の授業風景。

時代の恩師(浦和学院高校野球部、森士監督)のひと言だった。
新たな人生の目標が、くっきりと像を結び始めた。
「巨人をクビになった頃から、“第二の人生”のイメージが少しずつ明
確になってきたんです。プロ野球選手になることは、難関大に入るよ
り難しい。自分は幸運にもそんな貴重な経験をさせてもらった。だっ
たら、その経験から学んだことを後輩たちに伝えることが自分の使命
なんじゃないか、って」。

プロ生活の経験から学んだこと——それは“とことん考える力”の
大切さだという。
「プロ選手は、一人ひとりが個人事業主です。だから、どうしたら自分
がチームにとって価値のある選手になれるかを絶えず考えていなければ
ならない。誰もがうらやむような豊かな才能に恵まれながら、考える
力が足りなかったばかりにその才能を開花させることができず、結果と
してクビを宣告される選手を、何人も見てきました。だからこそ、後輩
や生徒たちには、自分はどうなりたいたいの、いまの自分に足りないもの
は何か、それを補うためには何が必要か、と徹底的に考え抜く力をつ
けてほしいと思っているんです」。

高校野球で全国制覇を—— 夢を後押ししてくれた母校の縁

高校野球の指導者になって、埼玉県の高校初の全国制覇を目指
すという新たな夢が見つかった。しかし、目前には超えなければなら
ないハードルがあった。
「大学の夜間部に通いながら働くためには、夕方早くに仕事を切り上
げなければならないし、残業もできない。会社の理解が不可欠です。
内定をいただいた企業もあったんですが、なかなか条件面での折り
合いが付きませんでした」。

そんな状況を救ったのが母校の縁だった。運送会社を経営する、
硬式野球部の先輩が運転手として採用してくれたのだ。埼玉県か
ら甲子園優勝校を。そんな夢を共有する人のつながりが、三浦さん
への期待となって現れた。

仕事は、自動車メーカー・ホンダの工場へ部品を運び入れる仕事。
倉庫で部品を積み、工場で降ろす。倉庫と工場の往復は1日9回。
部品の中にはエンジンなど、数百キロに達するものもある。1日のタイ
ムスケジュールを聞くと、「朝は6時前に出勤。午後4時ごろに帰宅し
て、5時には大学に向かう。6時10分から9時20分まで講義を受け
て、家に着くのは10時ごろ。12時にはベッドに入ります」と語る。
淡々とした口調に、悲壮感は微塵も感じられない。そこには、夢に向
かってまっすぐに突き進む者に特有の、充実した表情があった。

かつての大学生生活は「99%が野球、勉強は1%だった」と冗談交
じりに語る三浦さんだが、社会人となってからの「新たな学び」には、
当時感じることでできなかった刺激や喜びがあるという。

「勉強の目的がはっきりしているからでしょうね。毎日の授業が楽しく
てしょうがない。特に専門が“政治経済”なので、実社会での仕事経
験も、教師や指導者を目指すうえで絶対にプラスになると思うん
です。例えば、東日本大震災の影響で東北を中心とした部品工場が
大きな被害を受け、自動車の生産に大きな影響が出ましたが、自分
自身も日々仕事をしている中で、そのことを肌で感じました。いろん
な人のいろんな仕事がつながって、社会が、経済が動いている。そし
て自分の仕事もそこにつながっている……こんなこと、プロ野球選
手時代には考えたことがありませんでした」。

学生時代の三浦さんは、投手として通算46試合に登板し13勝
19敗、防御率2.47、218奪三振を記録。優勝した2000年秋のり

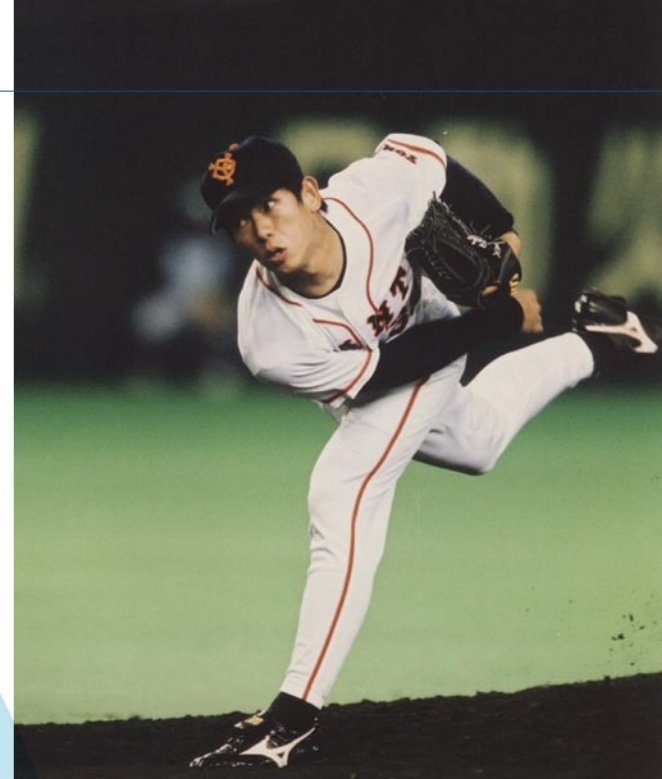
2000年秋季リーグ戦で、
11季ぶり9度目の優勝。
春季リーグ最下位から
の優勝はこのとき史上2
度目。



川越の優勝パレードにて、同期の仲間たちと、
左から2人目が三浦さん。2年生の時2部
落ちも経験した。



2試合連続の完投勝利で7勝目をマーク。
投手として、主将として、待ち続けた瞬間だった。



2001年3月31日、プロ野球選手として公式戦に初登板。
観客の歓声が聞こえなくなるほど緊張し、一球に集中していたという。

リーグ戦では7勝2敗で最高殊勲選手、最優秀投手、ベストナインを
獲得している。

東洋大学硬式野球部は、今年の春季リーグ戦で16回目の優勝
を決め、さらに全日本選手権は連覇。先輩である三浦さんの目に、
後輩たちの活躍はどう映っているのだろうか。

「率直な気持ち言えば、『どうしちゃったの？ 東洋大学』って感じて
すね(笑)。僕らの頃は、『4年に1度は優勝』が目標のチームでした
から。僕らの代の前後から、毎年コンスタントに数人がプロ入りする
ようになり、全国の強豪校の選手が入部するようになって実力をつけ
てきたなという感じがします。今はそういう“いい循環”ができてい
るんじゃないですか。そのおかげなのかどうかかわからないけど、高橋(昭雄)
監督も昔よりずいぶん優しくなったような気がします(笑)」。

今年6月には母校・浦和学院高校での教育実習を終え、来年3月
には教員免許を手にする予定。現役の東洋大生に向け、こうアドバ
イスを送る。「いまのうちに、自分が将来、何になりたいかを、できる
だけ具体的にイメージして欲しい。最近では、せっかく就職しても数年
で辞めてしまう学生が少なくないということですが、漠然と考えていた
のでは、自分が何をすべきかが見えてこない。僕自身、教員免許を取
って高校野球の指導者になると決めたときからは、仕事と勉強の
両立も、むしろ喜びになった。学生生活の中で自分の将来について
とことん考え抜いてほしい」。

プロ野球選手になるという夢を叶え、さまざまな困難を乗り越え、そ
していま、また新しい夢に向かって学ぶ彼の言葉には、これから担
う後輩たちへの熱い想いが込められていた。

Profile

みうら たか
1978年生まれ 埼玉県出身
浦和学院高校卒業後、1997年4月東洋大学
経営学部商学科に進学し、硬式野球部に所属
2001年3月卒業
2000年のドラフト会議で読売ジャイアンツから
3位指名を受け入団
2008年シーズンから現・埼玉西武ライオンズに移籍
2009年戦力外通告を受け引退